

## 盆地の

## ミクロコスモス群

## カトマન્ズ

西村幸夫

世界記念物会議前副会長

東大教授

撮影・編集部

パタンの王宮前広場エントランス、  
世界遺産のエンブレムが見える。街  
路の彼方にはヒマラヤの高峰が聳え  
ている

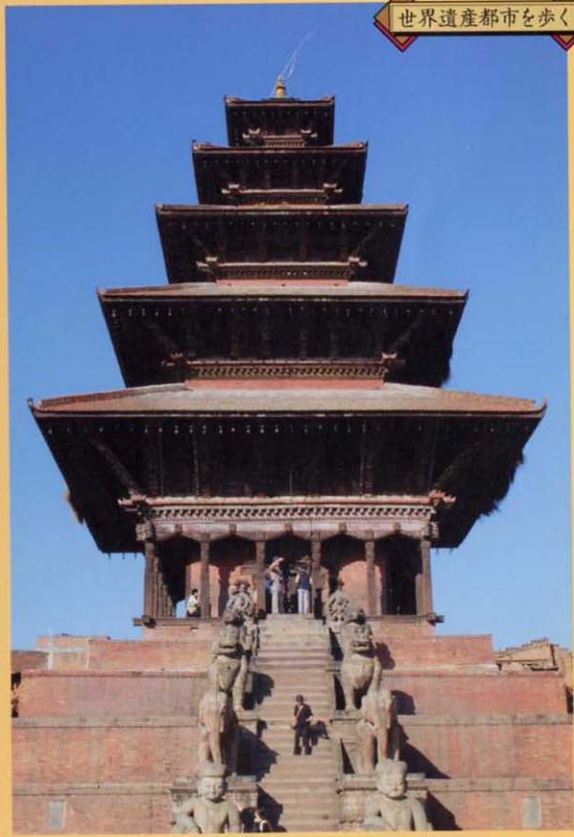
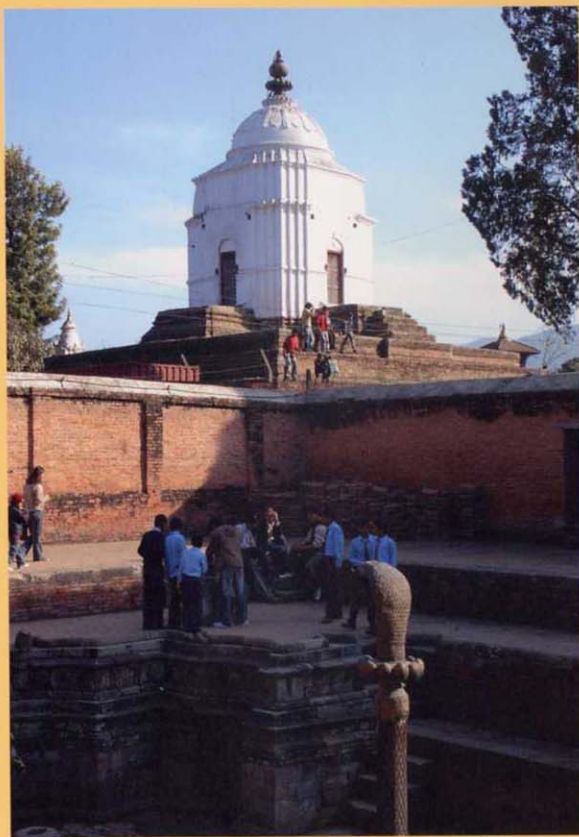
## Patan Durbar Square

World Heritage Monument  
(Listed in 1979)

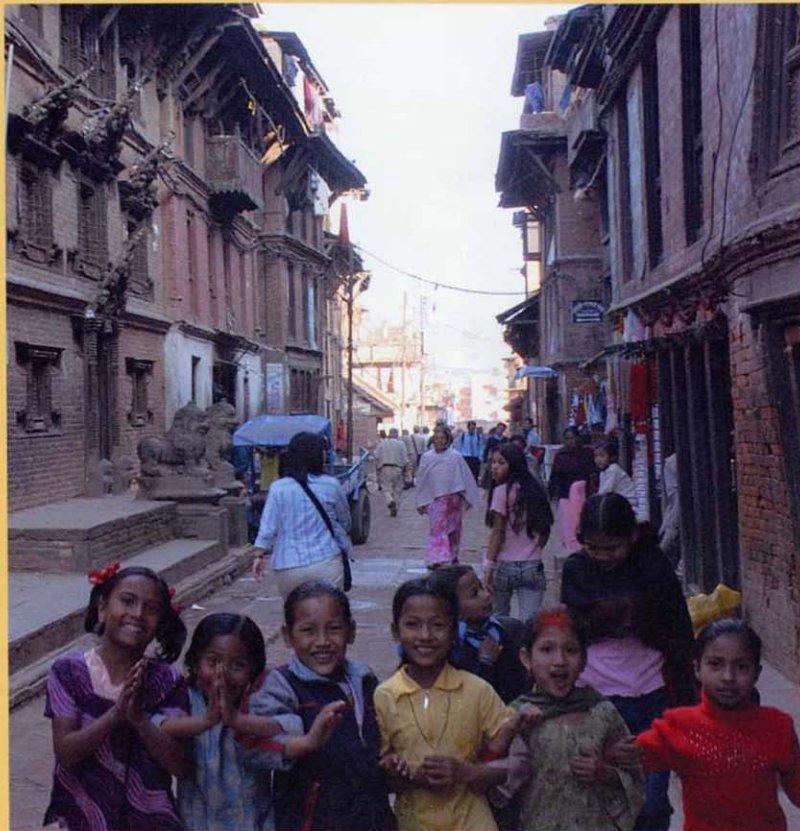
Patan, famous as the oldest city in the Kathmandu Valley, is also known as the "City of Fine Arts". The exquisite artworks and architectural buildings scattered in and around the Patan Durbar Square are from the 16<sup>th</sup> century and onwards. But the history of Patan goes back to the Licchavi period on the basis of an inscription on the Mungu Yiu (water spout) dated 570 AD which was constructed by Bharbi (grandson of Mandey). Most of the monuments of this Palace Complex were built during the reign of King Siddhi Harasingh Malla (1618-1661 AD), the first independent Malla dynasty king of Patan. He constructed Sundari Chowk which holds in its center the Royal Bath called Tushahly, a masterpiece of stone architecture. He also constructed the temple of Taleju and Bhandarkhal pond. His other great contribution is Krishna Mandir (1636 AD) temple dedicated to Lord Krishna. Krishna Mandir is the first specimen of Shikhar style architecture in Nepal. Govindra Malla (1661-1684 AD) completed the construction of the Chowk which was started by his father and enlarged the temple of Taleju and Bhimsen. Yogananda Malla (1688-1705 AD) created the temple of Manjushree and his own statue on the capital of a octula pillar. The northernmost courtyard known as Keshav Narayan Chowk is the most important and one of the oldest courtyards of this Palace Complex. Patan was subdued by King Prithvi Narayan Shah the Great without bloodshed in 1768 AD after the surrender of six Pradhans. Patan remained the administrative unit of the country for centuries.

Royal Tourism Board  
Date: March 2001

UNESCO World Heritage Site  
Department of Culture, Kathmandu



世界遺産都市を歩く



右頁上はバクタプールのダルパール広場全景。奥にバツアラ・ドルガ寺院（左）やバシュバティナート寺院が見える。この先に第2の広場トウマディ・トールがあり、右下の5層のニャタポラ寺院が聳えている。広場と塔状寺院の連なりがカトマンズの町並みの特徴づけている。下左は旧王宮裏の貯水池から見たファシデガ寺院。広場の東には左頁の街路が次の広場タチュバル・トールに延びている。王家との対立が深刻化し、大人の表情は暗かったが、子供たちは屈託がない。



●バクタプール

ネパール・カトマンズ盆地のトリブバン国際空港に降り立つと、誰しも抜けるような青空と緑あふれる周囲の山並みに不思議な懐かしさを感じるに違いない。宗教的ともいえような崇高な懐かしさなのである。ひとつには山の濃い緑の情景が極東日本とよく似ていること、もうひとつには盆地の規模がちょうど甲府盆地や松本平のようなスケールで、日本の襲の多い地形とよく似ていることがその理由かもしれない。ともあれ、標高1300mという高地のわりには潤いのある緑豊かな風景が私たちには心地よい。

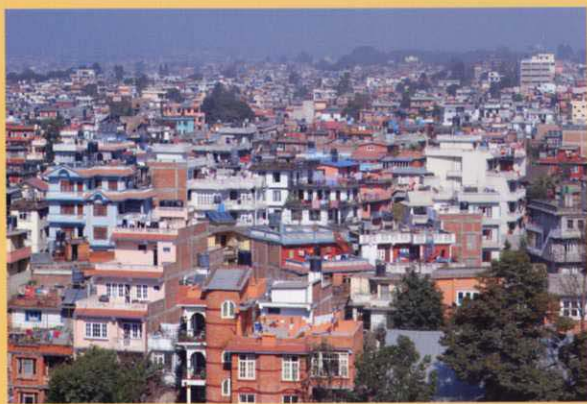
カトマンズ盆地の生成にかかわる地学的な由来を知っているとそうした情感はさらに深まるかもしれない。この盆地はかつては満々と水をたたえた湖だったと考えられている。ヒマラヤ山脈をうがって開析谷をつくってきたガンジス川の支流がついにこの先史時代の湖に接することとなり、湖水は一気に河に飲のみ込まれ、湖水は流れ去り、あとにカトマンズの盆地が残されたというのである。その証拠にガンジスの流れ

カトマンズのまちを歩くと、アジアのほかの都市とは異なって、都市内の各所に配置された広場が次々と連なり、都市の構成要素として重要な役割を果たしているのがわかる。日本も含めほとんどのアジアの都市では、ほとんどのアクティビティは固定された広場ではなく、人々が行き交う街路が舞台となっており、そのせいか西洋的な意味での広場がほとんど発達していない。対するにカ

はるかヒマラヤ山脈の北側、中国国内に源流がある。つまりはヒマラヤが隆起する以前から北から南へ大河が流れており、山塊が隆起するにつれて谷を削りだし、いまの地形を作り出しているというのである。

なんとというロマンだろうか。こうした物語を心に留めてカトマンズの盆地を眺めわたすと、太古の湖底の静寂が満ち満ちているような気がしてくる。風景とは、ひとつの場面を旅する人の心のなかにこそ生起するものだということを、カトマンズの盆地は実感させてくれる。風景は物語に依拠しているのだ。

\*\*\*



上の写真は右がシバ・バルバティ寺院。つし2階の窓からシバ夫妻が往来を見下ろしている。左はナラヤン寺院。二つの寺院間に民間の建物が見えているが、ユネスコでは不調和な景観としている。

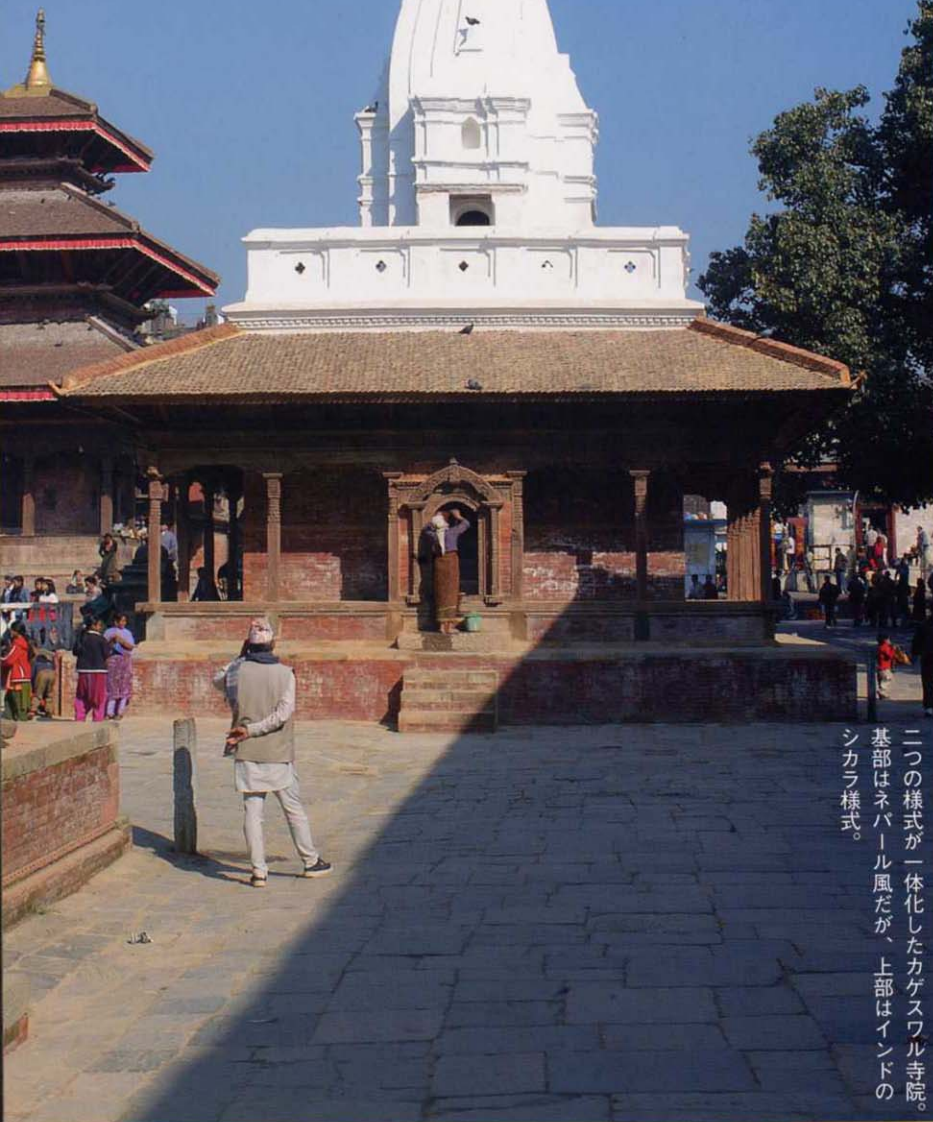


●カトマンズ

トマンズでは広場が都市活動の中心となっており、街路はそれぞれの広場を繋ぐ網の役割を果たしているようだ。両者あわせて都市の網の目ができる。

カトマンズの広場は都市生活の日常的な活動を支えているだけでなく、各種の宗教的儀式の場であり、政治的空間でもある。とりわけダルパール広場と呼ばれる王宮前の広場は、いずれの王国においても、もつとも重要な政治的場である。なぜなら、ここは戴冠式や即位式などの各王国の根幹的な儀式が執り行われる広場であり、平時でも王の命令が臣民に伝えられた場でもあったからである。ここは聖と俗とが邂逅する場でもある。望楼や石塔が建ち並び、街路の焦点となっている。

また、カトマンズに限らずネパールの都市には囲み型の確固とした都市型のタウンハウスの型がある。煉瓦造で3、4層から成り、1階の店の敷居や鴨居から2階から上の窓の姿、各階の階高などすべてが小振りにできている伝統的なこのタウンハウスにはお伽の小屋を見ているよう



二つの様式が一体化したカゲスワル寺院。基部はネパール風だが、上部はインドのシカラ様式。

な不思議な懐かしさを感じてしま  
う。この囲み型住居と広場のネッ  
トワークによって、カトマンズ盆  
地の都市は欧州的な緊密さを感じ  
させる。いや、広場の随所に配さ  
れたガネーシヤなどのヒンドウの  
神々の像や寺院のモニュメント、

巡礼者のためのマンダパと呼ばれ  
る建物などがそれぞれの小空間に  
独特の求心力をもたらしている。  
そうしたミクロコスモス群の有機  
的な網の目の広がりのほかのどこ  
にもない南アジアの固有の文化を  
感じさせてくれる。

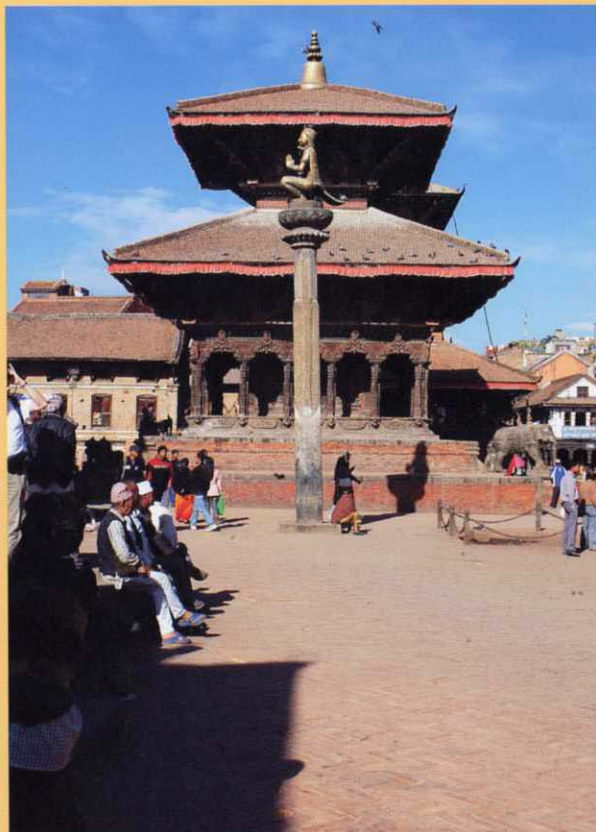
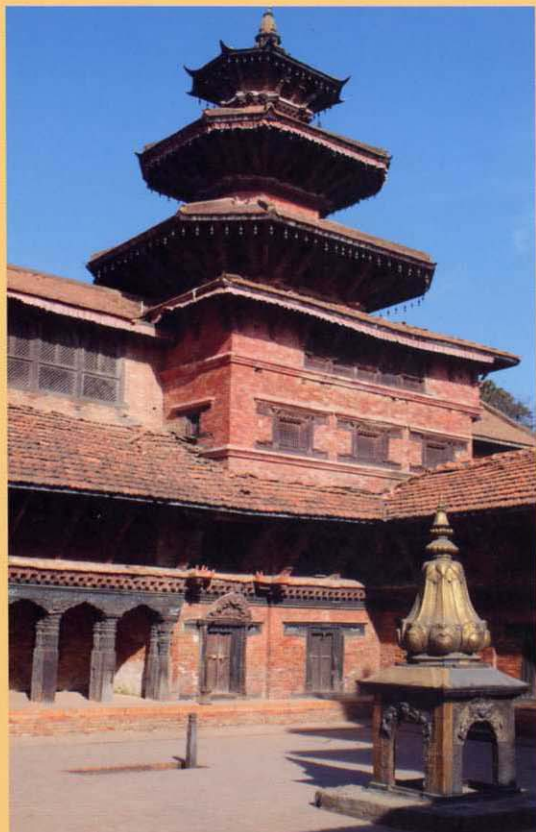
目を盆地全体に転ずると、カト  
マンズの盆地は、かつて有力な3  
王国が共存する小宇宙だったとい  
われている。カトマンズはそのな  
かののひとつとして、盆地にある  
他の都市、バタン（ラリトプール）  
とバクタプールとで3都を構成し

ていた。それぞれの都市はお互い  
に数キロから十数キロ離れている。  
さらにはキルティプールなどの小  
都市もそうした小王国のひとつで  
あった。したがっていずれにも王  
宮があり、王宮前広場がある。盆  
地スケールでもミクロコスモス群  
の併存という都市の姿をみること  
ができる。

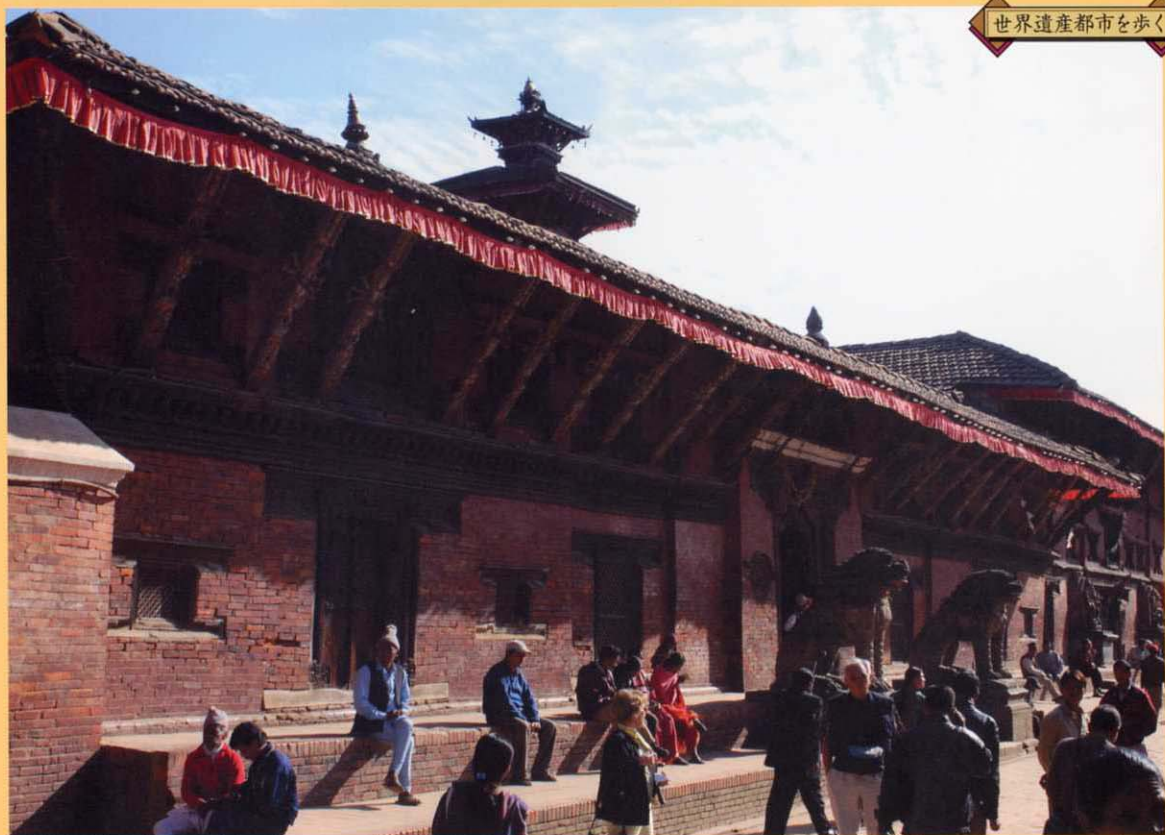
\*\*\*

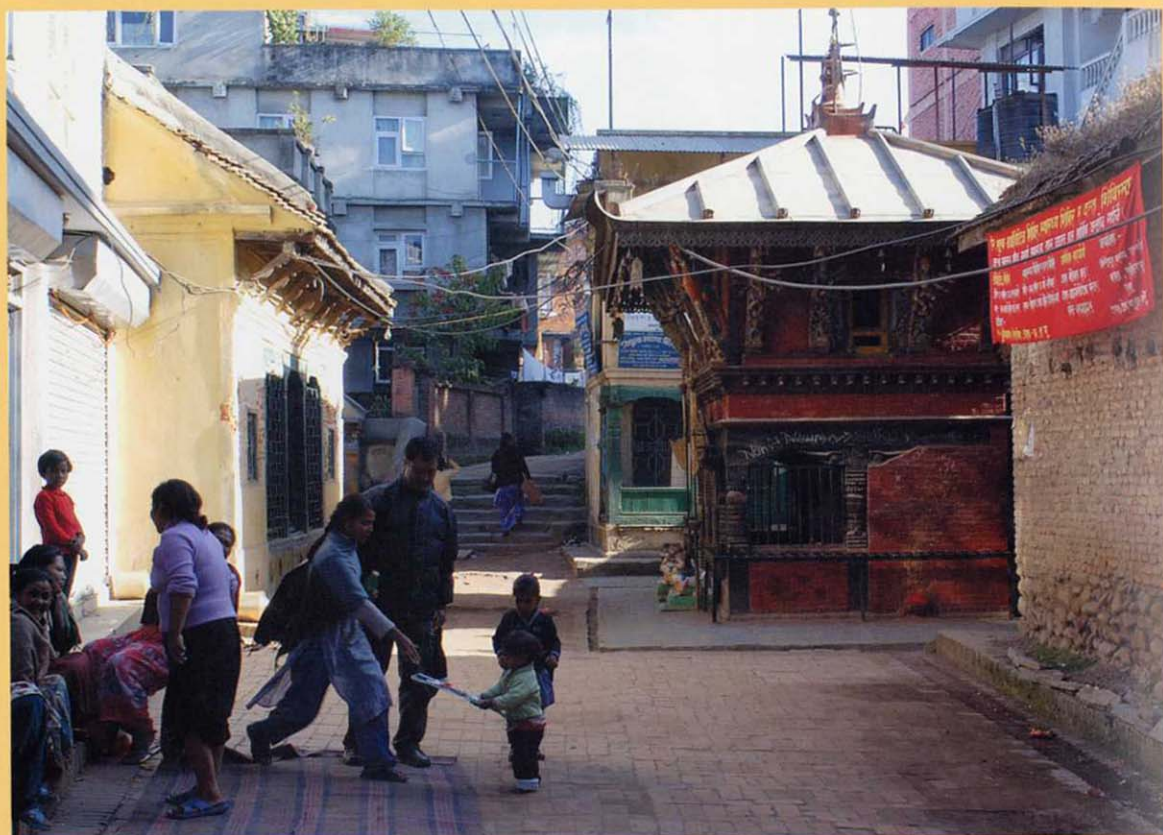
カトマンズ盆地が「カトマンズ  
の谷」の名でユネスコの世界文化  
遺産として登録されたのは197  
9年である。登録されているのは  
盆地の文化遺産のうち、ハヌマ  
ン・ドカ（カトマンズ）の王宮前  
広場、バタンの王宮前広場、バク  
タプールの王宮前広場、スワヤン  
ブナートの仏塔、ボタナートの仏  
塔、パシユパティナートのヒンド  
ウ寺院、チャング・ナラヤンのヒ  
ンドウ寺院の7カ所である。

カトマンズ盆地はまた、150  
万人近い人口を擁する大都市圏で  
もある。これに海外からの観光客  
が年間40万人以上訪れる観光地で  
もある。このところ政情不安が伝



世界遺産都市を歩く





●パタン



右頁右上はビスワナート寺院とガルダ像。左上は王宮広場ムル・チヨーク（中庭）の北東隅に建つテグダレ寺院。中庭の中央には小さな金箔のピツチャヤ寺院が建つ。下の写真はムル・チヨーク入口。2体の獅子が門を守っている。街路途中にある小さな広場と祠。そこは人の集う場だ。左は路上の果物屋。

えられるが生活状況は年ごとに向上しており、目抜き通りの人通りは絶えない。

こうした事情からカトマンズの都市は改変の強い圧力に晒されることになる。もちろん伝統的な生活様式はいまだに根強いので、まちが一挙に近代的なビルに取って代わられることはないといえるが、古いタウンハウスが壊されて背の高いゲストハウスが建設されたり、大きな看板が目につくようになりたりと近代化の波はまちの各所に見ることができ。さらには都心部への各種の交通流の集中や不適切な修理工事なども報告されている。とりわけ都市生活のへそであり、同時に観光の目玉でもある王宮前広場の周辺の変化が目につく。そして三都ともダルバール広場は世界遺産のコアである。そのことが問題を生むことになる。

1990年代のはじめからこうした開発と破壊の問題が世界遺産委員会でも毎年議論されるようになり、破壊の防止や法制度の整備、主要建造物のリストの整備、世界遺産地区の線引きの見直し、保存技術者教育、



キルティプールの王宮前広場  
周辺の風景（筆者写す）

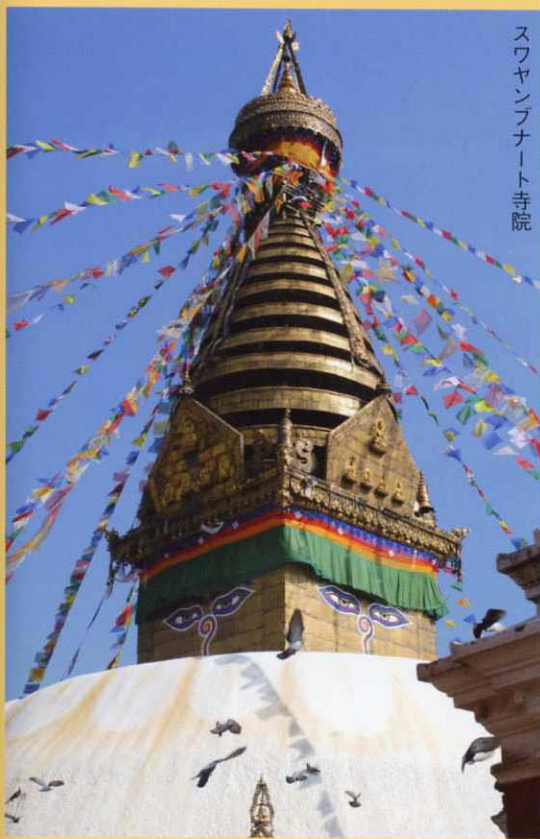
一般市民の関心の向上などに関してほぼ毎年複数の報告書が提出されてきている。

しかし、生活環境の改善も必要な要求であり、これと世界遺産の保存とをどうバランスさせ、さらに観光の要請にも応えていくということは並大抵のことではない。それも法制度が未整備で、かりに法律があつたとしても実効性に疑問が残るのが途上国の常である。

ついに2003年、世界遺産委員会は「カトマンズの谷」を危機に瀕した世界遺産リストへ搭載すること

を決定した。その後も問題が解消したわけではなく、委員会はさらに世界遺産からの抹消も議論しているが、まだそこまでは至っていない。

ただし、カトマンズ盆地を歩く私の目から見ると、伝統的な建築物と信仰、生活様式が織りなす町並みの光景には世界遺産としての「顕著で普遍的な価値」がまだまだ充分にあると感じる。問題はカトマンズ盆地の魅力を補強することにつながるような巧みでセンシティブな開発が地元社会に支持され、根付いていくかという点である。



スワヤンブナート寺院